

境忠一著 『宮沢賢治の愛』

花田, 俊典
九州大学助手

<https://doi.org/10.15017/12084>

出版情報 : 語文研究. 47, pp.40-43, 1979-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

境 忠一著『宮沢賢治の愛』

花 田 俊 典

※

本書「宮沢賢治の愛」は、著者にとって「評伝宮沢賢治」（桜楓社、昭43・4）「宮沢賢治論」（同前、昭50・11）につぐ第三番目の賢治研究書にあたる。著者にはこのほか、八詩における近代と近代Vの問題を様々な角度から考察した「詩と故郷」（同前、昭46・3）「詩と土着」（葦書房、昭46・12）「近代詩と近代」（同前、昭50・3）の三評論集があるから、つまり全体として本書は六冊目の著書ということになる。ちなみに著者にはまた、創作の分野において、「ものたちの言葉」（同前、昭46・11、第二回福岡市文学賞・第八回福岡県詩人賞）「迷った羊のおふれる夜に」（同前、昭50・11、第二十六回日氏賞最終候補）など数々の詩集や、八失われた故郷Vとしての大牟田および有明海の内なる人々と自然とを描いた詩的散文集「小さな母の里」（ロッキィ、昭53・3）などがある。いまさら贅言を要すまでもなく、すでに広く知られているところであろう。

本書は、賢治研究の第一人者たる著者が出版者からの依頼に「ほ

とんどためらうところなく」（「まえがき」）応じ、「ONNO選書の一冊として意欲的に書き下ろしたものである。研究者以外の一般読者層のあることを考慮して、本書ではかなり懇切な記述様式がとられている。著者にとっては多分に煩雑な手順だったのだろうが、むしろそのために、いっそう綿密な研究書となっているところがある。しかも加えて、著者によって慎重に選ばれた平易なことはや表現は、賢治の文学が総じて難解であるだけに、その文学の本質を解明するための鍵として貴重であり、きわめて示唆にとんでいる。本書は一見してポピュラーな啓蒙書のようにありながら（じっさいそうにはちがいないが）、そのじつおおいに熟読玩味すべき画期の賢治研究書なのであると言つてよい。

ところで、ひとりの作家の愛の軌跡をたどる作業は、ともすれば肝要の文学の本質から遠く離れた興味本位な視角にまどわされ、つい恣意的な研究になってしまうがちである。その傾向は、ことに数多くのいわゆる伝説がつきまとっている作家の場合にいちじるしく、おそらく賢治もそのような作家の一人に数えて失当ではあるま

いと思われる。周知のように賢治は厳しくおのれを律して、独身重貞のまま三十七歳でその生涯を終えている。当然そのことに關するエピソードも真贋とりまぜて多いわけで、近来賢治文学の評価が高まってくるにつれ、レブラ説なども交えて議論は果てしないように見受けられる。むろん、それはそれなりに大切な作業にはちがいないが、しかしわれわれが研究対象としているのは賢治の文学そのものなのであり、そのことには留意しておく必要があるだろう。

本書にいう賢治の愛とは、「賢治文学の核心をなし、賢治の思想の中心に位置するもの」としての「愛」を意味している。

本書はいうまでもなく、賢治の性愛のみを問題としたのではない。それは賢治自身が意識的に性愛を宗教的な愛や芸術に昇華することを意図しているために、必然的に展開しないわけにはゆかなかったことでもある。(中略)また、わたしは賢治の伝記と作品を混同するのは誤まりだとしても、作品と伝記を切り離して考える方向にはついてゆけない。むしろ、賢治のように宗教や芸術や科学を一個の人間の問題として消化しようとした存在にとっては、その伝記と作品が論理的な必然として不可分に結びついているところがある。(「まえがき」)

つまり、かかる認識にもとづいてこそ、はじめて伝記研究なるものがそのまま文学研究として多大の意義を有するのだといえる。

本書は全体が、「第一章・初恋の歌と百合の花」「第二章・「春と修羅」ととし子の死」「第三章・農民活動と「(雨ニモマケズ)」」の三章から構成されている。その具体的な内容については、創見として注目すべき部分も多いのだが、しかしそれらを逐次ここで紹介するのは、紙幅の都合などもあって、とうてい困難であると言わざ

るをえない。ただ、小見出しを含む周到な目次があり、本書の内容の大概を端的にも語っていて便利である。したがって、以下においては、各章ごとにまず目次を示し、そのあとに簡単な若干のコメントを付すことにしたい。

※

第一章・初恋の歌と百合の花

- 1 母イチと賢治の中学進学 / 2 古着屋を継ぎたくない / 3 盛岡中学卒業と入院 / 4 初恋の歌一首と晩年の詩稿 / 5 古着屋と初恋の関係 / 6 盛岡高等農林学校進学と初恋 / 7 文語詩「百合を掘る」と「恋」 / 8 百合の歌と「ガドルフの百合」 / 9 なぜ木に恋したのか?

賢治の「初恋」は大正三年の春、盛岡中学を卒業して岩手病院に入院したとき、その看護婦だった同年輩の女性とのあいだに芽生え、周囲の反対などもあって同年の夏頃に終熄している。本章では、この恋の顛末が述べられたあと、それが近代の恋愛の典型的な形態と同じく家からの独立という自我確立の強い要素を備えていたことが説かれている。さらに続けて、しかしこの「初恋」は思春期にありがちな一つのエピソードとして片付けられるものではなく、その後も賢治のなかに潜行して自ずから別の意味を持ってくるところが重要なのだ、という。すなわち、賢治は現実上の恋愛感情を、たとえば「あの百合は折れたのだ。おれの恋は砕けたのだ」(「ガドルフの百合」)といった形で百合に転化し、昇華することで乗り越えようとしている。そうして、草や木に恋することによって自然

と交感し生命力にふれる思考を身につけていくわけで、そこから、「春と修羅」が必然的に導かれることになる、というのである。

第二章・「春と修羅」ととし子の死

- 1 「春と修羅」の出版／2 「春と修羅」とは何か？／
- 3 「恋と病熱」と「春光呪咀」／4 「春と修羅」と「冬のスケッチ」／5 「小岩井農場」の決意／6 禁欲の理念と論理／7 宮沢とし子とその死／8 「永訣の朝」から「白い鳥」へ／9 「オホーツク挽歌」ととし子／10 「風景とオルゴール」と恋愛

イーハトーヴの自然を謳歌し、妹とし子への挽歌を収めた心象スケッチ「春と修羅」は大正十三年四月、賢治二十七歳のとき自費出版されたものである。「春と修羅」の「修羅」は一般に人間、とりわけ煩惱になやむ自我を否定的な形で捉えた表現と、一方の「春」は生命のわきあがるよろこびの象徴としての季節、自然を意味するとされている。本章ではその「春と修羅」を、いわゆる恋愛否定によって恋愛をうたった△恋愛詩集▽と見なし、新しい角度から検討することが試みられている。

たとえば、賢治は「恋愛」を「たましひの病^{やまひ}」と考えていた節がある。しかし「春」を生命讃歌と考えていた賢治が、やはり生命の作用である「恋愛」をなぜ「呪咀」しなければならなかったのか？この「恋愛否定」の自己矛盾こそが、「春と修羅」第一集の最大の主題になっている、という。さらに、賢治は一人を愛することはすべてを愛す障りになると考えており、それは「小岩井農場」における(一)宗教的情操(二)恋愛(三)性慾の三つが様々な過程を経て(四)宗教的情操

に至るのだという△恋愛三段階説▽によっても知れる。そういった賢治の思想がつまり、妹とし子を異常なまでに強く愛する行為に至らしめたと考えることができる、などと説く。著者に「この書のヒロインは、主として第二章で述べた妹とし子ということが出来るだろう」(「まえがき」)とのことばがあるところで、相当に力の入った章だと言わねばならない。

第三章・農民活動と「(雨ニモマケズ)」

- 1 なぜ農学校を止めたのか？／2 「農民芸術概論綱要」の観念性／3 羅須地人協会の文化活動／4 高瀬露のこと／5 「(聖女のさましてちかづけるもの)」／6 伊藤ちゑと「三原三部」／7 無料肥料設計相談所／8 東北砕石工場技師とは何か？／9 「(雨ニモマケズ)」とその評価／10 禁欲と女性観

賢治の死後、彼の愛用したトランクの蓋裏のポケットから古びた一冊の手帳が発見され、そのなかに「(雨ニモマケズ)」は書き残されていた。本章では、この「(雨ニモマケズ)」に至る晩年の農民救済活動のことなどが中心に述べられている。なかでも特に、「(雨ニモマケズ)」の評価の問題に関して、同作品には「賢治が経験した農民との断絶の深さが横たわって」おり、「おそろくその断絶の深さが「ホメラレモセズ／クニモサレズ」という自己抹消につながってゆくのだろうが、その献身を通して、賢治はついに断絶のはてにある民衆を描くことに成功したのではなかったらうか」とあるくんだり、著者の賢治観を語っていて興味深い。賢治論を△出発点▽として△詩における近代と反近代▽のテーマへと向かっ

たという著者らしいことばでもある。



以上で簡単ながら本書の紹介を終えることとして、すでに御存知の方も多いと思うが、著者である境忠一先生は、去る一月三日、病氣のため福岡大学附属病院に入院中のところ、急逝された。四十八歳であった。

先生は、本学を御卒業ののち、最近まで福岡大学教授として長く九州の地におられたが、数年前に東京の立正大学へ移られていた。

東京へ単身赴任されてからは健康が思わしくない御様子で、本書の書き下ろしに取組まれていた頃は、死期を感じる程に悪かったのだと聞く。にもかかわらず、先生のエネルギーな御健筆ぶりは、地の利を得たこともあって、以前にもまして盛んで、それは病床にあってからも続いていた。何うところによれば、先生は、書き尽くせないほどのA材料Vがある、と洩らされていたとのことである。御病氣とはいえ、その突然の死は、まことに痛恨事であるというほかない。切実な問題として、われわれが余儀なく支払われた犠牲は大きい。わたしは、文化の損失ということばの実感を、いまになって初めて痛く苦く思い知らされた。おそらく、その実感は、時がたてばたつほど増すのだろうが、すでになす術もない。ひたすら先生の御冥福を衷心よりお祈り申し上げ、先生の大恩に報いるべく決意を新たにす次第である。

(昭和五十三年三月 主婦の友社 二〇六頁 七〇〇円)